

## 小学校はいま―数値目標をかかげて

聞き手 片岡 弘

一年間の小・中・高校、大学生の自殺者が八百八十六件にもおよんだと報じられました。そのとき文科大臣がテレビで「これを二〇%以下にまで減らしたい」と述べましたが、「あれ、どこかで聞いたような言い種だな」と思いました。実はいま学校では、教育計画にあらかじめ達成の数値目標を掲げることが求められているのです。

### 数値目標を掲げて学力も体力も

A先生は教職三十余年のベテラン小学校教員です。お訪ねして学校はいまどうなっているのか率直に

お聞きしました。先生は言います。

「たとえば、県の学力テストの結果は県全体の平均点(平均通率)と市町村ごとの平均点が公表されます。それで各学校は、年度当初の教育計画に前年の県平均を目安にして得点の数値目標を掲げるようになります。それぞれの学級経営案にもその数値目標を書かなければなりません。結果は学校評価や個々の教員の評価にもつながりますから、少しでも平均点を上げて成果を示したいと、先生方は必死ですよ」。学力テストは本来、児童・生徒の指導・学習の結果、到達した学力を把握する

ために行うものなのに、あらかじめテストでの得点数値目標を設定するというのは、どこか本末転倒しているように思えます。算数の授業などでは能力別(到達度別)の三クラスに分け、落ち込んでいる子ども们的クラスに退職教員などの“学力向上支援員”を配して指導しているそうですが、「テストのための練習」まがいの授業も行われているようだと言っていました。こうした数値目標は学力に関してだけでなく、体力(テスト)でも生徒指導においても求められているといえます。

### 先生方は追いまくられている

A先生の奥さんのBさんは、やはり小学校に勤務する事務職員です。Bさんの学校は十年ほど前までは児童数が百人を超していたといいますが、少子化といわれる今はほぼ半分

の人数に減ってしまいました。しかし、「少人数だけれどそれなりにいいところがいっぱいあります」とBさんは言います。たとえば給食は、ランチルームで全職員、全児童がいつしよですから、担任の先生だけでなく教職員全体が子どもを見ています。一人ひとりの子どもにも目が届き、家庭の状況までよくわかるそうです。少子化でしかも核家族の子が増え、なかには両親がきびしく家ではいつも「いい子を演じて」いて、たまったストレスを発散できずにひどいチック症状を見せる子もいます。そんなときいち早く「あの子、ちょっと様子がおかしいね」と誰かが気付いて担任に連絡し、ケアすることができます。

「反面、教職員の数が少ないので一人何役もこなさなければなりません」とBさん。「この三月末に県教

委、校長会、PTA連絡会などが中心になって『いじめ根絶県民会議』というのができたのですが、四月に早速、校舎の外壁に張る横断幕(二万五千円)を注文するようにと連絡がありました。すべてそんなかたちで次から次へと課題が上から降りてくるのです。いじめ対策はもちろん、学力向上対策、体力アップ研究……前から継続されている豊かな体験学習、子どもの安全対策等々も、残ったままですから、先生方はほんとうに追いまくられている感じですよ。全部が全部、到底やり切れないだろうに、と思うほどです」

### 使われていないコンピュータ室

「とにかくすごく忙しいんですけど、子どものためにはよかったと思われることもあります」とA先生が口を挟みました。特別支援教育という

ことで講習が開かれたり委員会が作られたりして、障害や問題行動のある子に対する先生方の理解がそれでぐっと深まったということです。

「もちろんお可笑しいことはいっぱいありますよ」先生は笑いながら付け足しました。「立派なコンピュータ室があるんですけど、使いこなせる先生がいらないんですよ。中心校にはいますけど、そういう先生が計画的に配置されていないのですね。以前はそれでも広域の視察員ライブラリーがあつて講習をやってくれたり、技術指導に学校に向いてくれたりしたのですが、いま、それがなくなつてしまいましたから……」

教員の数も増やさないと、あれもこれもという感じでさまざまな対応策が降りてくる。「疲れますね」「夫婦はそう言つて顔を見合わせました。 (かたおかひろし・研究所員)